

聞名仁教

第 126 号 毎月発行
(発行日) 2021 年 3 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

人生の一大事

「人生の一大事」

佐々木蓮磨

蓮如上人は

「ワレラガ今度ノ一大事ノ後生」

と仰せられました。また上人の門侶道宗さんは自分を誠め励ますために二十一ヶ条の厳しい箇条をつくって懈怠になる心を厳しく誠めてゆかれましたが、その第一条に「後生ノ一大事、命ノアランカギリ油断アルマジキコト」と銘記しておられます。

ところが、ここに後生とある言葉を死後の問題として受けとり易いのですが、実は死に直面した場合の心がまえのことでもあります。

次に一大事とあるのも、人生における一つの大事と解し易いのですが、実は人生において、ただ一つしかない大事ということでありま

す。一言にして申しますと、

人間として本当に心から安心しようとするならば、なんと云っても、まず死の問題を解決せねばならぬということでもあります。死の問題を解決しなかつたならば、いかに仕事に成功したと言っても、財を貯えたと言っても、また名誉を得たと言っても、浮世の夢でしかありません。

人生五十年は、一夜の夢が五十年に延びただけではありませんか。一夜の夢は夜明けに醒めますが、人生の夢は臨終の夕べに醒めます。かように考えてゆきますと、真の幸福者は死の問題を解決して永遠の生を自覚し、日々希望を抱いて若々しく前進する人でなくてはなりません。

近來、老人の福祉問題がやかましく言われていますが、いかに老人を大切にしたいか、死期の近づく

『近代教学と伝統宗学の接点』を出版。
私家版で出版しました。ご入り用の方がございましたら、お送り致します。
住職

淋しさと不安とを除くことはできません。この淋しさと不安は老人のみではないでしょう。深く自己を反省するならば、いかなる富豪も権力者も同じであります。

現代は科学が進み便利な世の中とはなりましたが、人間の悩みは決して解消しません。解消するどころか、却って年を追うてふえてゆくのみではありませんか。こうした悩みを解消する道は、人間の知恵による小細工では駄目です。あくまでも人生苦の根源を断ち切る以外にはないでしょう。そのためには、なんと云っても生死の問題を解決して永遠の生命を獲得する以外にはないと思います。

蓮如上人が
「八万ノ法藏ヲ知ルトイウトモ後世ヲ知ラザルヒトヲ愚者トス。タトエ一文不知ノ尼入道ナリトイウトモ、後世ヲ知ルヲ知者トス」

と申されたは、実に千古不磨の金言でなくてはなりません。後世とか後生とか申しますと、すぐに死後のことに受けとり易いのであります。ですが、実は今日只今の一大事でもあります。

なぜかと言えば、人間として「死」の問題を解決せずして、どこに真の安心と喜びが得られましようか。いかなる権力者も富豪も、また智者も学者も、深く考えてみれば墓場への旅をしているに過ぎません。そうなるに信仰に生きて永遠の喜びを持つ人は、平生も精神的に幸福な生活を営み、死も往生の喜びで受けてゆけるのです。

最近、私の知っている同行の美わしい臨終の模様を聞いて深い感激を受けたのであります。その一人は九十才の老人でしたが、臨終に及んで枕辺に看護している息子夫婦にお礼を述べ、

合掌念仏しながら安らかに往生したのであります。

もう一人は八十五才の老人でしたが、これも老衰の極、口もかなわぬようになって往生したのですが、息を引きとるときニツコリと微笑ながら往生したのであります。おそらく人間としての力が衰えるにつれて、仏力がいよいよ明らかに感得されたのでありましょう。親鸞聖人が八十八才の十一月に乗信房に送られたお手紙に

「信心決定ノヒトハ、ウタガイナケレバ正定聚ニ住スルコトニテ候ナリ。サレバコソ愚痴無智ノヒトモ、オワリメモメデタク候」と記されてありますが、私は今の二人の老同行のうるわしき臨終の模様を聞いたとき、この親鸞聖人の晩年のお言葉を思い起して、まことに有り難く、また尊く感じたのであります。

(了)

南無阿弥陀仏の仰せ

富山県の大谷派寺院の住職さんがご門徒につきのような質問をされたそうです。

- ①「南無阿弥陀仏という仏さまはどんな仏さまですか？」
- ②「仏さんはどんなことをいっておられますか？」
- ③「念仏申すとどうなりますか？」
- ④「私たちはどんなふうに迷っているのですか？」
- ⑤「私たちは仏になれるのでしょうか？」
- ⑥「なんで私が仏さまになれるのですか？」

先月号で①について述べましたので、今月は②について述べてみたいと思います。ここで「仏さんは」という仏とは①で申しました南無阿弥陀仏という仏さまのことですか。南無阿弥陀仏は「どんなことをいっておられるか」ということになりす。そこで「南無阿弥陀仏はどういうこ

とを仰せになっているのですか」という南無阿弥陀仏のお心のこと、すなわち阿弥陀仏の本願のお心、本願の内容は何かということになります。

この本願の内容はどこに示されているかと申しますと、釈迦仏の説法すなわち佛説無量寿経の中に説かれています。釈迦仏はアミダ仏の本願の働きをその元にたずねる形で、いわばアミダ仏の因位のところから物語的に説かれていきます。本願の働きを抽象的に説いても私たちには伝わりません。アミダ仏のお心をどのよ

この上ない悟りを開かれ（無上覚）、それによってアミダ仏のご本願を感得され、しかもアミダ仏の働きを言葉でもつて明らかにお示し下さった、そこに釈迦仏のご恩があるのです。それが佛説無量寿経です。その内容を簡単に申し

「遠い遠い昔、ある王様が世自在王仏の説法をお聞きになり、非常に感動して、王の地位も名誉も財産も破れ草履の如く捨てて、修行者（比丘）になって悟りの道を求められました。その名を法藏比丘とか法藏菩薩と呼ばれています。そして今までどなたも起こされたことのない世に超えた広大な願いを起こされたのです。それは自分だけが悟って仏になるのではなく、一切衆生を救いたい、それによって自分も仏になりたい、という広大な大悲の願を起こされたのです。そしてどうしたらそれを

が四十八願です。この四十八願を成就することによって一切衆生を仏にすることができるといふ確信をもたれたのです。この四十八願の内容は、

一つには法藏菩薩ご自身が（私はいくつという仏になりたい）という願、たとえば私は光明無量・寿命無量の仏になりたいとか、私の名（南無阿弥陀仏）が十方の諸仏に讃えられたいというような願を建てられました。そして一切衆生を仏にするには一切衆生を浄土に生まれさせて仏にしたいと願う、その浄土はこのような領域として成就したいという、仕上げる浄土についての願、たとえば浄土には地獄や餓鬼や畜生という苦しみのない世界でありたい、また一たび浄土に生まれたらもはやまた地獄とか畜生というような苦しみの境界に落ちることがないという浄土にしたい、あるいは浄土は衆生の滅度（さと）りを完成する世界でありたい、そしてそこに生まれた衆生は、迷える境界に赴いて限りなく苦しむ衆生を救うような働きをする徳を成就する浄土でありたい、などです。



そして、そういう浄土に一切衆生をこのようにして生まれさせたいという（衆生往生の願）を起こされました。これは私たちにとって非常に大事な願であります。

こうして四十八願を起こし、そしてこの四十八願を成就するべく兆載永劫といわれる限りなき修行に入られました。

法藏菩薩のその修行は貪りも怒りもなき修行であり、この世の何ものにも執着しない修行であり、善き言葉を語りどのような苦しみにも耐え忍び、

浄らかな菩薩行（六波羅蜜行）を行い、その功德を衆生に与えていく、こうした行を尽くしていかれたのです。そして一切衆生が救われる功德を成就し、一切衆生が救われる見通しが完全について、法藏菩薩は一切衆生に先立って十劫の昔に仏になり、現に一切衆生を救う働きを永劫に続けたもうアミダ仏になってまします」

ざっとこのような法藏菩薩の本願とその成就が無量寿経に説かれています。

さて、一切衆生を救うて浄

土に生まれさせてくださる衆生往生の願こそ私たちにとって一番大事な願ですが、それは四十八願の中の第十八願に示されています。すなわち

「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」

という誓いです。この願が一切衆生を平等に浄土に生まれさせて下さる誓いなのです。

この願文をどう読むかについては、曇鸞・善導・法然などの高僧の導きによって親鸞聖人は第十八願を深く領解なされました。

その聖人のご領解に沿って十八願を分かりやすく申しますと、「十方の衆生」とは「生きとし生ける者よ」との法藏菩薩の仰せです。「至心に信樂して、我が国に生ぜんと欲ひて」とは「念仏往生の誓いは真実だから疑わずに信じて我が国に生まれるとおもうてくれよ」との法藏菩薩の私たちに對するお勧めのお心、中心は「信ぜよ」であります。

そして何を信ぜよと仰せら

れるかというところ、「乃至十念せん、もし生ぜずは正覺を取らじ」との誓いであり、これは「たった十声なりとも一声なりとも念仏申すばかりで、もし汝が浄土に生まれないようなら、この法藏は正覺（仏）を取らない」という、法藏菩薩ご自身の正覺（成仏）をかけたものにしてまで誓われた念仏往生の願です。すなわち「ただ称えるばかりで助ける、そのほかに何もいらぬ、まるまる助ける」との誓いであり、

そして「ただ五逆と誹謗正法とをば除く」は「汝は縁あれば親を殺し、聖者を殺しかねず、十悪を日々造るような五逆の罪を造る身であり、ことに仏法を否定してやまない救われがたき身である」と私たちの罪深き姿を指摘されるのです。すなわち自分がどのような者か全く無自覚な私たちに、私たちが真理に反逆して生きている姿をはっきりとお示しくださるのであります。私たちの現実の相は救われ難き罪深き身であるとお知らせくださるのです。

そしてそのような救われ難

き者をこそ助けずにはおかない、（まるまる助ける）の誓いが「乃至十念せん、もし生ぜずは正覺を取らじ」であって、（どうかこの真実の誓いを信じて浄土に生まれると安心してくれよ）とお勧めになるのであります。

更に親鸞聖人は深く第十八願のこのお心に分け入り、この念仏往生の願を信じる心までも成就しようとお心が十八願にあると見られ、それは「至心信樂して我国に生まれんと欲え」というお心であると領解されて第十八願を（至心信樂の願）とも仰せられます。すなわち第十八願は念仏往生の願を根柢にして至心信樂の願をも誓われていると見られるのです。いわば第十八願には行も誓い信も誓われているのです。宗祖はご消息に「行と信とは御ちかいを申すなり」と云われています。

まるまるのお助けが私たちに既に働きかけられています。が、この救いを受け入れなくては我が身の救いにはなりません。迷いの海の中でアップアップしている私たちに救いの大船が来て、「乗れよ、助け

るから」といわれても、船に乗らなくては私の助け船にはなりません。しかし自分の力ではお助けの船に乗る力もない私たちであります。すなわち念仏往生の願（力）がましませども、それを真実に信じる信心を起こせないのです。本願念仏の船に乗る（信じる）力もないのであります。

そこで、念仏往生の誓いを信じることもできない者ゆえ、そういう者に「ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」と知らせ、「乃至十念せん、もし生ぜずは正覺を取らじ」の底抜けの大悲を聞かせることを通して、広大な大悲心を衆生に回向して信心として成就せしめたいと誓われたのです。その回向したもう思し召しが「我が国に生まれんと欲え」のお心であり、このお心を宗祖は善導大師などのお導きを通して回向心と受け取られました。回向とはめぐらし与えることとあり、ここでは与えるとは表現し聞かせることです。「我が名を称えるばかりで助ける」とお聞かせくださるのであります。アミダ仏はアミダ仏の大悲を私たちに回向し聞かせ

大悲を私たちに回向し聞かせ

【住職雑感】

朝夕、仏間でお勤めをする。夕方は偈文などで簡単に済みます。朝は正信偈をあげたり、聖典を読んだり、お念仏を申す。ふと「実に贅沢な生活させていただいている」と感じる。昔の三井財閥の三井本家宅では現在はどうか知らないが小さなお寺ほどの広い仏間があったと云われている。一般家庭では、幅50センチほどの仏壇が多い。しかるに我が家では八畳の間の正面が全部仏ましますところである。三井家と変わらないではないか。ご本尊の前で毎日、手を合わせ、経典を誦誦し、聖典を読み、念仏をしばし称える、何と恵まれたことではないかと改めて感じる。最近は大らかな仏壇でありながら、小さな仏壇に変える人とか、仏壇を廃棄する人もいる。実に惜しいと思う。大きな宝を捨てるようなものである。静かに仏壇の前で手を合わせ、仏陀の言葉を読み、アマダ仏の名をしばし称える。「アマダ仏 われらとともにまします。アマダ仏 われらとともにましまして 我をたのめと喚びたもうなり。我がために身をすてられしみ仏の ご恩受く身を世にささげたし。」と唱えてお勤めは終わる。こうした日々の一生が尽きれば仏の世界へ生まれさせていただく。有り難いことである。

て、これを通して大悲の心を私の心に届かせて信心となつてくださるのであると、宗祖はお示しく下さいました。

念仏往生の願を信ぜしめて助けたいという至心信樂の願は、念仏往生の願の大悲を回向する（欲生我国）ことによつて成就して下さるのであります。念仏往生の願はお助けの願であると共に念仏往生の願を信じる信心の出どころでもあります。信心は私の心から起るのではなくて念仏往生の願心を書く（聞其名号）ところ、極まりなき大慈大悲のお心が衆生に届いて本願を信ぜざるを得なくなるのであります。こうしてお助けの船に乗らせていただくのであります。アマダ仏の大慈大悲の心が届いて私たちが念仏往生の願を信ぜざるを得なくなるのは本當に不思議です。これに関して蓮如上人は「いかに不信なりとも、聴聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候うあいだ、信をうべきなり」と仰せられています。

は念仏往生を誓われた乃至十念の念仏（南無阿弥陀仏）を聞かせてくださる（聞其名号）ことによつて大悲の願心に向して下さるのです。その念仏往生の誓いを南無阿弥陀仏の名号として衆生に回向し聞かせたいとの願いが第十七願であります。欲生我国の回向心は第十七願となつて具体化しています。第十七願によつて念仏往生の願心のこもつた名号を私たちに回向し、聞かせて下さるのであります。なんとという不思議なおてだてでしょう。もし一切衆生を無条件に救いたもう念仏往生の願が働いていても、それが私たちに聞かせてくださり、お知らせくださらなくては私の救いにはなりません。

しかもお聞かせくださる念仏往生の願心は南無阿弥陀仏という一句、極めて端的な一句に縮まって仰せくださるのです。ややこしい、長たらしい仰せではありません。極めて端的な仰せ、すなわち勅命であります。

そこで、南無阿弥陀仏の仰せとは、第十八願のお心でありますから、「信ぜよ（至心信

樂）、我が名を称える（乃至十念）ばかりで助ける」の「信ぜよ」は「信頼せよ」であり、「マカセヨ」であり「タノメ」の仰せであり、「我が名を称えるばかりで助ける」は「ソノマナリデ助ケル」ですから、十八願は「タノメ、タスケル」の仰せであります。けれどもこの「タノメ」は、たのんだら助ける、まかせたら助けるというのではありません。私たちの方へ何も要求されない大悲の心を表す言葉が「タノメ」「マカセヨ」です。ですから十八願の「タノメ 助ける」は「まるまる引き受ける」「助ける」の一句の勅命に収まります。仰せぎりであつて私たちに何一つ要求はないのであります。私たちはこの仰せを「聞く一つ」であります。

「助からぬ者」なるがゆえに、「助からぬ者を助ける」と仰せられます。

なぜ「ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」と言われるのかと云えば、私たちの心は憍慢であつて我が身の姿を知らず、自分の能力をたのみにしていて、どこまでも助かりにかか

り、なろうにかかつて容易にアマダ仏のお助けにお任せせずに自分の能力をあてにしているのです。それゆえ、分かつて助かるう、たのんで助かるう、信じて助かるうとする自分へのたのみ心、それを離れさせ、救いなき身と自分を見限らせることによつて、アマダ仏の「お引き受け」をたのませて下さるのです。「ただ除く」とは「汝は仏法の救いから除かれてゐる者」、「助からん身だぞ」と知らせて私たちの計らいを離れさせてくださる言葉です。このように私たちの方から助かるうとかかる自力の計らいの手を「助からぬ者よ」と切つてくださるのです。そして、その助からぬ者をこそ助ける南無阿弥陀仏であるぞと、無窮の大悲を知らせてくださる。こうして南無阿弥陀仏はお知らせであり、お知らせせがりであり、それを聞くばかりであります。聞く一つで助かるのです。

このようにして第十八願に一切衆生を阿弥陀仏の本願の働き一つでまるまる助けてくださる救いを表されたのであります。

（了）